

- 目 次 -

調査の目的と方法

1 .調査の目的と分析の基本方針	1
2 .調査概要	2
3 .回答者属性	4
4 .用語の定義と取りまとめのルール	5
5 .要約	6

第 章 一週間の買物行動

1 .買物回数	12
2 .購入先別買物行動	16
3 .購買決定プロセス	21

第 章 食肉等の購入状況

1 .一週間の食肉購入状況	25
2 .食肉売り場と選定基準	52
3 .最近の食肉に対する意識について	60
4 .食肉産地別の購入意向	64

第 章 食肉の購入構造

1 .食肉市場の構造(食肉比較)	67
2 .食肉市場の構造変化	69

第 章 食肉の表示や情報について

1 .食肉の表示の関心状況の推移	73
2 .食肉の関心状況一覧	74
3 .食肉の表示内容別関心状況の推移	75

第 章 夕食の肉料理に関する実態

1 .夕食の形態	79
2 .夕食の献立材料	84
3 .夕食調理における食肉保存状態	89
4 .夕食における食卓人数	94
5 .夕食調理における食肉使用量	99
6 .食肉を使った夕食料理メニュー	104
7 .肉料理に関するイメージ分析	116

第 章 消費者の肉の好み

1 .食肉の好き嫌い	122
2 .食肉の選定基準	123
3 .牛肉のイメージと好きな部位	127
4 .豚肉のイメージと好きな部位	128
5 .鶏肉のイメージと好きな部位	129
6 .肉を使った料理で好きなメニュー	130
7 .銘柄肉	131

第 章 メニュー提案チラシに関する分析

1 .メニュー提案チラシの利用状況	134
2 .希望する一人当たり予算	139
3 .希望する調理時間	143
4 .希望するレシピ内容	147
5 .希望する付加情報	152
6 .メニュー提案チラシを見て作った料理	156

第 章 国産和牛の分析

1 .購入状況	157
2 .利用状況	163

第 章 口蹄疫の分析

1 .口蹄疫についての理解度	165
2 .口蹄疫発生後の食肉の購入状況の変化	166

調査の目的と方法

1 調査の目的と分析の基本方針

1. 調査の目的

本調査は、消費者の食肉の購入状況、夕食での食肉調理に関する実態、食肉に対する意識などをアンケート調査を通じて収集し、季節別、年度別、年代別、地域別など様々な角度から分析を行い、国産食肉の消費拡大及び流通合理化対策等に資することを目的としている。

2. 分析の基本方針

分析を行う上では、時系列の変化を見ることと、回答者の属性による違いを見ることを2つの大きな柱としている。

時系列の変化を見るためには過去の調査との比較を行う必要があり、調査項目は基本的に前回は踏襲するが、必要に応じて変更も加えている。

回答者の属性別の比較では、基本的に年代別、地域別、世帯年収別、世帯構成別という切り口を用い、各層の違いを分析して示唆を得るよう心がけた。

また、国産和牛の消費拡大をテーマとし、第 3 章において国産和牛に焦点を絞った分析を行ったほか、平成22年の春から夏にかけて宮崎県南部を中心に広まった口蹄疫についての理解度や影響の分析を第 4 章にまとめた。

2 調査概要

1. 調査対象期間

平成22年6月24日(木)～30日(水)までの7日間

2. 調査手法

これまでの調査手法を踏襲し、今回調査においてもインターネット調査を実施した。対象者は、モニター群から抽出した。

また、インターネット調査では回答サンプル数の獲得が難しい沖縄県の20代、40代、50代、60代以上の一部についてはランダムウォーク調査を行った。

3. 調査手順

1) インターネット調査

6月18日(金)～21日(月)；調査の参加意向者募集

対象者条件と調査概要(7日間、食肉等の購入と夕食についてのメモをとってもらうこと)を提示

6月23日(水)；当選者に調査協力依頼

7日間の精肉等の購入と夕食についてのメモ用紙のダウンロードを依頼

6月24日(木)～30日(水)；調査対象期間

6月30日(水)～7月6日(火)；調査回答受け付け

2) ランダムウォーク調査

6月23日(水)；調査票配布

6月24日(木)～30日(水)；調査対象期間

7月7日(水)～12日(月)；調査票回収

2 調査概要

4. 対象者条件

アンケートの対象者は、20歳以上で、自分で「食材を購入」して「調理」をしている“主な”家事担当者。但し、市場調査関係者、マスコミ関係者、広告代理店関係者は除いた。

5. 集計対象

2,431人からアンケートの回答を得た。そのうち、以下の10地域、5世代を掛け合わせた50セルについて1セル40人、計2,000人をランダムに抽出し、集計対象とした。

図表0-1 集計対象者の地域、世代分布

	20代	30代	40代	50代	60代以上	合計
北海道	40	40	40	40	40	200
東北	40	40	40	40	40	200
関東	40	40	40	40	40	200
北陸	40	40	40	40	40	200
東海	40	40	40	40	40	200
近畿	40	40	40	40	40	200
中国	40	40	40	40	40	200
四国	40	40	40	40	40	200
九州	40	40	40	40	40	200
沖縄	40	40	40	40	40	200
合計	400	400	400	400	400	2,000

図表0-2 地域区分

地域名	都道府県名
北海道	北海道
東北	青森県、岩手県、秋田県、宮城県、山形県、福島県
関東	茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県
北陸	新潟県、長野県、富山県、石川県、福井県
東海	山梨県、静岡県、愛知県、三重県、岐阜県
近畿	大阪府、京都府、兵庫県、奈良県、和歌山県、滋賀県
中国	鳥取県、島根県、広島県、岡山県、山口県
四国	徳島県、香川県、愛媛県、高知県
九州	福岡県、佐賀県、長崎県、大分県、熊本県、宮崎県、鹿児島県
沖縄	沖縄県

3 回答者属性

図表0-3 回答者の世帯年収構成

(単位 :世帯)

合計	300万円未満	300～499万円	500～699万円	700～999万円	1,000万円以上	無回答
2,000	446	521	492	351	177	13

図表0-4 回答者の世帯構成

(単位 :世帯)

合計	子供が小学生以下の世帯	成長期の子供がいる世帯	20歳代の成人がいる世帯	子供がいない世帯	高齢者のみの世帯
2,000	280	288	606	603	223

図表0-5 回答者の家族構成員の合計数

(単位 :人)

合計	0～5歳	6～11歳	12～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳以上
6,092	489	314	399	912	961	793	943	1,281

図表0-6 回答者の職業

(単位 :人)

合計	専業主婦	学生	有職者 (フルタイム、 常勤)	有職者 (パート、 アルバイト)	自営業	自由業	農林 水産業	その他	無職
2,000	932	38	346	455	90	39	3	18	79

図表0-7 回答者家族の世帯主の職業

(単位 :人)

合計	サラリーマン	自営業	自由業	農林水産業	その他	無職
2,000	1,193	230	58	17	163	339

図表0-8 回答者の居住地域

(単位 :人)

全体	北海道	東北	関東	北陸	東海	近畿	中国	四国	九州	沖縄
2,000	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200

4 用語の定義と取りまとめのルール

1. 一世帯当たりと購入世帯当たり

- 一世帯当たりは、調査期間の1週間の中に一度も買物をしなかったあるいは集計対象の食肉を買わなかった等の世帯も含めた全世帯を対象に集計をしている。つまり、市場全体の値を示している。
- 購入世帯当たりは集計対象のうち、1週間のうちに購入した世帯に絞って集計をしている。

2. 食肉の分類

- 7日間の食肉等の購入状況について、1日毎に『精肉・鮮魚』と『肉類加工品・肉類惣菜』それぞれ2品まで回答を求めた。

3. 世帯構成について

世帯構成は、以下のルールをもとに5つに分類している。

- 子供が小学生以下の世帯
11歳以下の子供（男女を問わない）が1人以上おり、成長期の子供あるいは20歳代の成人（男女を問わない）がいない世帯。
- 成長期の子供がいる世帯
成長期（ここでは12～19歳を指す）の子供が1人以上いる世帯。11歳以下の子供あるいは20歳代の成人もいる場合は、成長期の子供を優先させてこの区分に入れる。
- 20歳代の成人がいる世帯
20歳代の世帯構成員が1人以上おり、かつ成長期の子供のいない世帯。
- 子供がいない世帯
30歳以上の世帯構成員が1人以上おり、かつ30歳未満の世帯構成員が1人も同居していない世帯。但し、高齢者のみの世帯を除く。
- 高齢者のみの世帯
高齢者（ここでは60歳以上の成人を指す）が1人以上おり、かつ60歳未満の世帯構成員が1人もいない世帯。

5 要約

今回の調査は、平成22年6月24日（木）～30日（水）に実施した。この時期は、3月頃から宮崎県南部を中心に広まった口蹄疫の被害が拡大している最中であり、さらに普天間移設問題などで行き詰まった鳩山首相が小沢民主党幹事長とともに電撃辞任し菅新政権が発足した直後にあたる。総務省統計局発表の消費者物価指数が17ヶ月連続で前年同月比マイナスを続けており、根深いデフレ傾向にある中、平成21年12月実施の前回調査と同様、消費意欲の低下と低価格志向が色濃く出た結果となった。

以下に、章ごとに今回の調査の結果を要約する。

第 章 一週間の買物行動

- 一週間の間に精肉・鮮魚または肉類加工品・肉類惣菜の買物をした平均買物回数（＝日数）は2.75回となった。
- 平均買物回数は、年代が高くなるほど多くなる。20代では2.21回だが、60代以上では3.11回。「週6回」以上買物に行った人の割合は、20代では0.8%だが、60代では10.6%となった。逆に、1回も買物に行かなかった人が20代で5.3%いた。世帯年収別では、最も少ないのは300万円未満の2.57回、最も多いのは700～999万円の2.99回となった。
- 購入先別の買物回数構成比では、1年前の平成21年6月と比べて「大型スーパー」が1.8ポイント低下し、「食品スーパー」が1.7ポイント上昇している。20代の購入先は「食品スーパー」（76.0%）と「大型スーパー」（14.4%）で90.4%を占めるが、60代以上では80.1%と約10ポイント下回る。50代、60代以上の高年齢層は「生協・農協系販売店」での購入比率が若い世代と比べると高い。
- 購買決定プロセスは「お店で特売だったので買った」が36.1%で最も多い。「家で」決める割合と「お店で」決める割合をみると、食肉類は鮮魚に比べ、「最初から家で買う肉・魚を決めていた」「家でチラシを見て決めた」という「家で」決める割合が高い傾向にある。

5 要約

第 5 章 食肉等の購入状況

- 主要精肉・鮮魚の一世帯当たり平均購入金額は、1,618円で、前回調査より60円減少した。
- 平均購入金額は年代に従って高くなり、20代の891円に対し、60代以上では2,360円と約2.6倍の購入金額となっている。
- 肉の種類別に平均購入金額をみると、「国産和牛」の購入金額が四国で436円、近畿で408円と他の地域より高めになっている。「国産和牛」の購入金額が主要精肉・鮮魚の購入金額合計を押し上げ、四国は1,812円、近畿は1,830円と、10地域の中で高めの金額となった。「国産和牛」の購入金額が低い北海道や北陸は、購入金額合計もそれぞれ1,242円、1,376円と低めの金額となった。
- 食肉小売店の選定理由は業態による違いがはっきりと現れた。最も利用頻度の高い食品スーパーは、近所にあって安い（「近所にある」（32.0%）、「安い」（25.4%））ことが選ばれる理由となっている。それぞれの業態が選ばれる理由は以下の通り。大型スーパーは「品揃えが多い」（31.3%）、生協・農協系販売店は「安全性が高い」（42.5%）、食肉専門店は「品質が良い」（28.3%）、百貨店は「品質が良い」（29.8%）、食肉ディスカウントストアは「安い」（60.0%）。
- 食肉小売店への要望は「衛生管理・鮮度管理の徹底」（58.1%）、「売価の引き下げ」（51.8%）を半数以上の消費者が挙げた。年代別にみると、若年層で価格、中高年齢層は衛生管理や生産履歴などの安全性に関する説明表示に対する要望が強い傾向となっている。
- 最近の食肉購入量の変化と、今後の食肉購入量の意向について、それぞれ「増えた（増やす）」を+1、「変わらない」を0、「減った（減らす）」を-1とした加重平均を算出。最近の変化は-0.12、今後の意向は-0.07となり、最近の変化を今後の意向が0.05ポイント上回った。今後の意向では「国産豚肉」と「国産鶏肉」の加重値がプラスとなった。

5 要約

第 章 食肉の購入構造

- 市場規模のレベルを表す一世帯当たり平均購入金額は、「牛肉」が最も高く390.8円。次いで「豚肉」383.9円、「鶏肉」204.2円、「挽肉」101.0円となった。
- 一世帯当たり平均購入金額において、「牛肉」が最も高くなった要因は平均購入単価が246.9円/100gと高いことによる。購入世帯率と購入世帯当たり購入量は「豚肉」(それぞれ58.0%、507.5g)が「牛肉」(それぞれ35.4%、448.1g)を上回った。
- 平均購入単価の安さは購入世帯率の上昇と購入世帯当たり購入量の増加に寄与する。「牛肉」の平均購入単価が246.9円/100gに対し、「豚肉」「鶏肉」はそれぞれ131.3円/100gと90.0円/100g。購入世帯率、購入世帯当たり購入量は「豚肉」「鶏肉」とも牛肉を上回る。購入世帯率は「豚肉」が58.0%、購入世帯当たり購入量は「鶏肉」が564.1gで最も多かった。
- 時系列をみると、平均購入単価は「牛肉」「豚肉」「鶏肉」「挽肉」すべて前回調査に比べてマイナスとなった。購入世帯当たり購入量と購入世帯率は肉の種類によってプラスとマイナス様々となったが、一世帯当たり平均購入金額は「鶏肉」のみプラス、その他3つの肉ではマイナスとなった。

第 章 食肉の表示や情報について

- 購入時に「必ず見る」を+3、「時々見る」を+2、「あまり見ない」を+1、「全く見ない」を0とした加重平均を算出し、食肉の表示内容に対する関心度を測った。これまでの調査と同様、ベスト3は「部位別表示」(2.80)、「消費期限表示」(2.74)、「国産輸入区分表示」(2.72)。「グラム当たり単価」も2.70と高い値であった。
- その他の「原産国名表示」(2.62)、「産地銘柄表示」(2.38)はいずれも前回より微減したが、同程度の水準を保った。「国産ブランド表示」(2.33)、「用途別表示」(2.10)は前回より0.05ポイント以上減少した。

5 要約

第 章 夕食の肉料理に関する実態

- 夕食の形態は「ほぼ手作り料理」（71.9%）と「手作りのメインディッシュ+惣菜（できあい）」（4.0%）を合わせた“内食”が75.9%、「惣菜（できあい）のメインディッシュ+手作り料理」（4.4%）と「ほぼ惣菜（できあい）」（7.2%）を合わせた“中食”が11.6%となった。
- 夕食に「精肉や鮮魚は使用しなかった」という回答が23.3%で、前回調査と比較して2.8ポイント増加した。「鮮魚」（21.5%）は前回と同じ使用率だったが、「豚肉」の使用率が2.2ポイント減少して21.3%となったため、「豚肉」を抜いて最も使用された食材となった。
- 夕食の食卓平均人数は2.90人で、前回調査の2.99人からやや減少した。
- 食肉を使った夕食メニューは「炒め物」「カレー」が、年代や地域にかかわらず上位に登場する。また、夏（6月調査）のため「しゃぶしゃぶ/冷しゃぶ」も上位に入った。
- 肉の種類別によく作られるメニューをみると、牛肉は「焼肉」「ステーキ」「肉じゃが」「すき焼き」、豚肉は「生姜焼き」「しゃぶしゃぶ/冷しゃぶ」「お好み焼き」、挽肉は「ハンバーグ」「餃子」「麻婆豆腐」、鶏肉は「唐揚げ」「煮物」が特徴的だ。

第 章 消費者の肉の好み

- 肉が「好き」（「好き」+「どちらかといえば好き」）な人は80.7%に及び、「嫌い」（「嫌い」+「どちらかといえば嫌い」）な人は4.5%だった。
- 食肉購入の際の選定基準は、51.1%の人が「価格の安さ」を挙げている。「国産か、輸入か」が49.6%、「鮮度の良さ」が44.2%で続く。
- 肉に対するイメージを種類別にみると、それぞれ最も多くあがったのは、牛肉は「スタミナ源（栄養がある）」（57.6%）、豚肉は「ビタミンB1が豊富」（66.2%）、鶏肉は「価格が手頃」（69.9%）だった。
- 肉の種類別の好きな部位は、牛肉は「ヒレ」（43.7%）、豚肉は「ロース」（50.7%）、鶏肉は「もも」（74.8%）がそれぞれ最も多かった。

5 要約

第 5 章 メニュー提案チラシに関する分析

- メニュー提案チラシの認知率は 89.8%に達した。実際にメニュー提案チラシをもらったことがある人の割合は 59.0%、更に実際に作ったこともある人の割合は 23.1%であった。「見かけたことはあるが、もらったことはない」という人も全体の 30.8%いた。年代別にみると、「もらったことがあり、作ったこともある」というメニュー提案チラシの利用経験を示す項目は、30代で 26.3%と最も高く、60代以上で 18.3%と最も低かった。
- メニュー提案チラシに望む一人当たりの予算は「251～300円」(24.6%)、調理時間は「11分～15分」(34.9%)という回答が最も多かった。
- メニュー提案チラシに望むレシピ内容は、「簡単に作れるメニュー」が 45.1%でトップ。次いで、「野菜が多くとれるメニュー」「少人数で無駄が出ないメニュー」となった。実際にメニュー提案チラシを見て作った料理は「煮物」(10.2%)、「炒め物」(9.2%)、「しゃぶしゃぶ/冷しゃぶ」(6.1%)の順となった。
- メニュー提案チラシに望む付加情報は、「その料理に合うもう一品のメニュー」(23.6%)と「カロリー」(23.1%)が多かった。

5 要約

第 章 国産和牛の分析

- 国産和牛の購入頻度は「月に1回程度」が32.6%で最も多く、次いで「年に数回程度」が29.4%だった。
- 牛肉を購入する回数に占める国産和牛の購入回数は、「必ず国産和牛」が30.6%。次いで「2～3回に1回程度」(23.6%)、「4～5回に1回程度」(17.9%)と、購入割合の高い順に回答が集まった。
- 最近の食肉購入量の変化と、今後の食肉購入量の意向について、それぞれ「増えた(増やす)」を+1、「変わらない」を0、「減った(減らす)」を-1として算出した加重平均は-0.29。和牛以外の国産牛も-0.29で国産和牛と同レベル。輸入牛肉は-0.22で国産和牛よりわずかに加重平均が上回った。
- 今後の購入量に対する回答の加重平均は-0.11で、最近の購入量に対する回答の加重平均-0.29を上回った。
- 国産和牛の100g当たり購入単価は351.9円で和牛以外の国産牛の1.6倍、輸入牛肉の2.6倍となった。
- 国産和牛の購入先は「食品スーパー」の割合が58.9%と最も高いが、主要食材全体と比べると9.4ポイント低い。
- 国産和牛を使ったメニューは1位が「焼肉」、2位「カレー」、3位「肉じゃが」となった。

第 章 口蹄疫の分析

- 口蹄疫についての理解度を尋ねたところ、「牛や豚等の家畜がかかる病気」が88.5%、「牛肉や豚肉を食べても感染しない」が73.5%で高い結果となった。「食鳥類は口蹄疫に感染しない」が最も低く、33.0%だった。
- 口蹄疫発生後の牛肉と豚肉の購入状況については、牛肉では「以前と変わらない・もともと買っていない」が80.2%、「全く購入しなかった」が8.2%だった。豚肉では「以前と変わらない・もともと買っていない」が89.4%、「全く購入しなかった」が3.1%だった。
- 牛肉・豚肉の代わりに購入を増やしたものは、牛肉で39.8%、豚肉で52.8%といずれも魚が最も多かった。